
魔王ゴリラ君傑作短編集

魔王ゴリラ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王ゴリラ君傑作短編集

【Nコード】

N0865J

【作者名】

魔王ゴリラ君

【あらすじ】

魔王ゴリラ君傑作短編集ぞろい！

主にホラー系を扱っています。

雇気楼（しんきろう）

キーンコーンカーンコーン

朝の始まりのチャイムが鳴り響く。

「おい！聡史俺の掃除もしとけ！」

「・・・うん。」

この子は、川村聡史。

杉藁中学校の、一年生だ。

この子の父親は、家を出て行き慕っていた母も、家で首をつって自殺した。

お金もなくいじめられる日々が過ぎていった。

ゆういつの楽しみといえば、帰りの薄暗い坂道。

ココを通れば、雇気楼のように死んだ母が見えるような気がした。

それは、日々濃くなって母の雇気楼も近づいてきているような気がした。

最初は、ぼやけていたが数日後来てみると濃くはつきりとそれであって近づいてきていた。

聡史は、おかしいとも思わなかった。

なぜなら雇気楼は、死んだお母さんのように見えたからだ。

これを否定したらお母さん自体を否定するのと同じことだと思ったからだ。

何日か、たつて久しぶりに友達から一緒に帰ろうといわれた。

坂道に差し掛かったとき耳鳴りがした。

目の前には・・・

「お、お母さん？」

と聞くと、コクリとうなづいた。

周りの友達は、何も見えないみたいにドンドン先へと進む。

（一緒に帰ろう・・・）

お母さんが、高い声で言つと、
体が勝手に動いた。

「!？」

（あなたも、道連れね・・・）

その後、聡史が家に帰ることはなかった。

今日は何の日？（前書き）

（あらすじ）

10年前の出来事は、地獄の始まりだった・・・
魔王ゴリラ君の自信のあるホラー小説シリーズ。

今日は何の日？

「やめてっやめて子供には手を出さないで！」

10年前、俺は失業のため荒れていた。

俺は、やるつもりはなかった・・・

気がついたら右手にナイフを持って目の前に子と母が
血まみれで倒れていた。

その後、失業人生ではなく逃亡人生の始まりだった。

ー10年後ー

俺は、やっと就職できて40歳になっていた。

「今日は、週末その上、新しい仕事に就いて8年目だ！飲むぞ」
ガハハハハハッ！」

最初のころは、アパートだったが
職に就いたのでマンションに引っ越した。

ガチャガチャ

「んっ？鍵が開いてるのかな」

ギィ

扉が開いた。

「ただいま。って誰もいないんだっけ。ハハハハッ！
飲みすぎたかな？」

その後、水を2〜3杯飲んだ後
寝転がりながらテレビを見ていた。

その時

ガチャン

ドドドドドドッ

突然玄関のドアが開き誰かが

こっちへすごい勢いで走ってくるような音が聞こえた。

「何だ!？」

辺りを見渡しても誰もいない。

(あなた・・・今日はなんの日・・・?)

「うわあああああ!？」

ささやくように、今日は何の日?と死んだはずの妻の聲がはつきりと聞こえたのです。

「きつと飲みすぎていたんだ!？」

(パパ今日は何の日?)

また聞こえました。

今度は、死んだ子供の声で

さっきよりも近づいてきているように・・・。

(今日は何の日?それは・・・)

私たちの命日だああああ!

「!？」

気がついたら右手にナイフを持って目の前に父親が血まみれで倒れていた。

お化け屋敷（前書き）

（あらすじ）

お化けのすむという屋敷に男が一人住んでいた。

お化け屋敷

ドドーン

雷が鳴り響く山奥に

古ぼけた屋敷が堂々と立っていた。

ココは、5年前からお化けが出るという
うわさの絶えない屋敷でもあった。

その屋敷に一人の男が住んでいた。

この屋敷に住み始めたのは、5年前だ。

その男は、口数が少なくほとんど何も喋らない
男であった。

ギシッギシッ

廊下を歩きワイングラスの入ったケースから
ワインとグラスを取り出し

口に含んでワインをたしなんでいる。

この屋敷には、お化けに興味がある人がよく

この屋敷の中に入ってくることもある。

この男の楽しみは、この屋敷内に入ってビビッている人を見る
ことである。

こんな古い屋敷に住んでいて楽しみはほとんどなく

コレがゆづいつの楽しみであった。

その時

また、興味だけで屋敷に入ってきた
者がいるようだ。

ギシギシ

古びた戸をあけて屋敷の中へ入ってきた。

「ココがうわさの・・・お化け屋敷・・・肝試しをしようか・・・」
玄関付近で順番を決めるじゃんけんをしている。

ギシギシギシッ

男は、屋敷に入ってきた者のところに行った。

そして、男は久しぶりに口を開き

「仕事か・・・。」

今日も、屋敷に悲鳴が鳴り響いている。

現在お電話に出ることは出来ません。(前書き)

(あらすじ)

電話をかけたときの現在お電話に出ることは出来ませんが、
死を表す合図かも！？

現在お電話に出ることは出来ません。

「もしもし・・・」

(プープープー。現在お電話に出ることは出来ません)

「繋がらないのか?」

俺は、近藤洋介「近藤洋介」ゾニーの会社員だ。

知り合いと待ち合わせしていたが、一時間待ってもいつころうに来る気配がない。

「帰るか・・・」

約束を忘れているのだと思い帰ることにした。

ブルルルル

「!?!」

携帯に電話がかかってきた。

カチャッ

「もしもし・・・」

(現在・・・お電話に出ることは出来ません)と、携帯の奥で聞こえた。

「い、いたずらか?」

不審に思いとつさに電話を切った。

家のドアを開き

リビングのソファに座った。

そして、何気に上を向き寝転び携帯を開いた。

「メールだ・・・」

見覚えのない人から

見覚えのないメアドからメールが来ている。

そのメールは、短く

（現在あ・・・お電話に出ることは出来ません）と、書いてあった。

「・・・はあ？何だコレ！？あつてなんだよ!？」よく見ると、あと3つもメールが来ている。

二つ、三つ、とドンドンメールを開いていく。

（現在あな・・・お電話に出ることは出来ません）

（現在あなた・・・お電話に出ることは出来ません）

（現在あなたはお電話に出ることは出来ません）

ー次の日のニューズー

ゾニーの会社員近藤洋介さんが

自宅で死亡しているのが見つかりました。

日記（前書き）

（あらすじ）

途中から驚愕の内容に・・・。

日記

2009年1月1日。

今日から健太けんたの日記を始めます。

1月2日

学校から帰る途中

後ろから妙な物音がした。

怖かったので急いで帰った。

1月3日

友達の昇平しょうへいと遊んだ。

1月6日

日記を中断してしまった・・・

昇平が空へ旅立っていった。

シヨックから立ち直れない。

1月9日

また中断してしまった。

あのことから立ち直れず部屋から

出なくなった。

1月10日

薄暗い部屋から物音が耳鳴りのように

鳴り響いている。

1月11日

クラスの子が、次から次へと交通事故を起こしていく。

1月20日

僕は、分かった。この物音は、死神の近づく音だと。

1月21日

物音が、僕に近づいてくる。

1月21日を最後に健太の日記は、途絶えた。

「……つと。これで終わりだ！出来た！」

作家の板垣健太は、短編小説の

いたがきけんた

一話を書き終えた。

「こんなのフィクションだよ！ワハハハハ！死神なんて
いてたまるかつ！」

と、死神の存在を否定するように笑う。

ガサツガサツ

「!？」

薄暗い、電気といえ机の上にある

スタンドだけだろうかそんな部屋から

耳の奥を揺さぶるような物音が鳴り響く。

(皆……死ぬ……)

物音は、次第に皆死ぬという言葉へと変わっていった。

この話を最後に健太の作品は、途絶えた。

天国

作者からのコメント。

今日から小説再開です。

前よりもレベルアップしているので見てください。

今回は、友達の要望で不思議系に挑戦です。

~~~~~

人は、天国をどんなところだと思っているのだろうか。  
幸せなところ、楽なところ。

答えは、個々人に分かれる。

だが、天国とはこんなところだったりする。

暗闇、会社帰りのAさんは人気の少ない裏路地を通過して  
家へと向かっていた。

自分の足音だけがあたりにごだまして、どことなく心細さも  
も覚えてくる。

真っ黒のスーツに身を包んだAさんの体は、暗闇に同化して首だけ  
で歩いている

と錯覚するほどだった。

家へ帰れば女房やもちろん子供も帰りを待っている。

温かいご飯にお風呂

接待に追われる現代サラリーマンにとっては、これとない幸福のひと  
時である。

それに、今日はAさんの30歳の誕生日。

前までは、さほど楽しみでもなく自分の誕生日を他人に聞いて  
思い出すほどどうでもいい行事に過ぎなかった。

だが、子供が出来てからというものの毎日が夢のように過ぎ去っていた。

タタタタッ

急ぎ足が、走り足へと変わった。

速度も倍増し家の玄関へと一直線に向かっていく。

Aさんが、ドアノブに手を掛け一気に引いた。

「ただいまー」

その瞬間。

Aさんは息を呑んだ。

そこには、包丁を持った女房が立っていた。

いや、立っていたんじゃないこつちに向かつて走ってきた。

あ。とも言えずにスーツは、赤く染まった。

鼓動の音が、耳にとどまって

荒い呼吸がやけにうるさく聞こえた。

Aさんはそのまま地面へと崩れたのであった。

「お疲れ様でした。」

「.....」

Aさんがゆっくり目を開けると頭に白色のヘルメットらしき

物がついていてその横に脳波を調べるようなものが置いてあった。

「30年間のプレーは、どうでしたか？ここでゲームオーバーだなんて

残念ですね。」

よく見ると、部屋から機械から何から何まで白で統一されていた。

Aさんの前には、白い制服を着た女性が顔を覗き込んでいる。

天国。

人は、ゲームをしているに過ぎない。

勉強、お金の稼ぎ、人生。

天国とは、ゲームからさめる事ではないのか？  
だから命は、ひとつなのである。

Aさんは、30年間ゲームをした部屋からゆっくりと  
本当の自宅へと向かって行った。

## 呪人形

今回は、相当怖く仕上げた出来栄はお化け屋敷以上です。

~~~~~

その人形は、知らぬ間に私の手元に現れた。

凜とした顔立ちの昔話などで出てきそうなフランス人形。

目は青く今からでもしゃべり出しそうなふっくらと盛られた唇。

その人形に私は、チワワとなずけた。

ふわふわと繊維の一本一本が肌に触れることが名前の由来である。

この人形は、2年ほど前に天国^{そら}へと旅立った大親友からもらったものである。

チワワと私は、まさしく友達のようにどこへ行くにも一緒だった。

だけど、みんなは認めてくれない。

怖い、気持ち悪い。

友も家族も次第にチワワを避けるようになった。

だけど、私はそれが苦とは思わなかった。

チワワには、大親友の魂が乗り移っている。

だから私を独り占めにしたがっている。

馬鹿らしいとは思いが、そのときは本気でそう思っていた。

だけど、私にも不思議なことが起き始めていた。

「お人形さん。身長測りましょうね。」

私は小さかった。

それでも、このときの恐ろしさは忘れられなかった。

買った当時より10cmほど背が伸びていたのだ。

ちよつとそのころからだ

人形に拒否反応を示し始めたのは。

私が、小学校に入学すると同時に人形を押入れへとしまった。

ほとんど、いやまったく開けない押入れの奥へと。

それからと言うもの人形のことを忘れたかのように新しい友達と遊んでいた。

そして中学生に入ったときには、完全に記憶から人形が消えていた。

「あれ？押入れが少し開いている。」

私はそのときおかしいとも思わなかった。

ほんの数センチ開いていただけだったからだ。

そのときは押入れをしまいなおしその場を後にした。

それからと言うものほぼ毎日押入れが数センチ開いている。まるで誰かに見られているような

監視されているような。

さすがにおかしいと思った。

でも、押入れを開ける勇気がなかった。

開けたらとんでもないことになる。

虫の予感とでも言ったらいいだろうか。

中3の冬。

そのときには、押入れのことは気にならなくなっていた。

「ねえ。このスキー板押入れにしまっておいて！」

母が大声で叫ぶ。

「はい。」

押入れを一気に開けた。

「なんで遊んでくれないの・・・？」

そこには、私と同じ身長の青い目をした人形が
こちらを見据えていた。

雨のち晴れ 第1章(運命・・・?) (前書き)

魔王ゴリラ君お勧めライトノベルです。

全10話の物語の始まりです。

雨のち晴れ 第1章(運命……?)

魔王ゴリラ君ライトノベルです。

今回は、アクシヨン系に挑戦です。

恋愛も練りこんであるので全話読めば感動するはずです。

最初で飽きないで全部読んで下さい。

全10章

~~~~~

雨の日に再会し雨の日に出会った。

いつもの笑顔で。

現在でも、うる覚えに過ぎない。

でも忘れることはできない。

その日に出会って、一生をともにした。

あの子の事を……。

(雨のち晴れ 第1章運命……?)

外は雨。

教室内は、じめじめとした空気に包まれている。

靴下もボトボトに濡れ、髪にも多少の水滴が残っている俺。

村田 慶介むらた けいすけは、大阪のとある中学校のごく普通の

中学3年生である。

俺は、窓の外に何がある分けでもないがボーと見てしまう。  
授業中も休み時間も。

外は、忙しい人間どもがアリのように忙しく動いている。  
そんなに急ぐ用事でもあるのか？ 実に変だ。



かといって俺が正当な意見を言っている分けでもない。  
俺も変だ。

受験をまじかに控えているというのにボーと毎日が過ぎるのを見ているだけ。  
実に変だ。

そして、この世界も変だ。

幽霊大国日本。

そう称されるほどの国にまでなった。

髪伸びる人形？

パワースポット？

幽霊？

その幽霊を成仏させるための職業でもある葬儀師（葬儀師）と呼ばれるものたちまで出てきた。

つまり、人は幽霊の成仏を入れて2回死ぬことになる。

これが世の中の決まり。  
実に変だ。

目に見える真実だけがすべてとも限らない他にも隠された何かがある。

そんなことをいつも考えている。

何も変わらない窓の外を見ながら考えている。

そうこう考えているうちにチャイムが鳴った。

学校の校舎と周りの地域を巻き込みながら堂々したメロディーを奏でる。

そして、朝の眠気も吹き飛ばすほどの勢いで俺の心の奥に突き刺さるこのメロディーが俺は好きだった。

先生が、チャイムと同時に教室へ入ってくる「はい。早く席に着け。」と、口うるさく

注意した後、教卓の後ろに立った。

「今日は、転校生がおるんで紹介しとこう。」

先生は、いつもより声が張ったような口調で話す。

生徒は、先生の言葉に拍手をする者や戸惑いを見せる者などがいて性格が表に出てて面白い。

「はい。入っただい。」

先生は、教室の前のほうのドアに向かって手招きをする。

足音が教室に近づきドアの前で止まる。

少し間はあったが、「はい。」という少し高めのトーンの声が聞こえた。

(女子か……)

俺は、心の中でつぶやいた。

なぜなら、性格ゆえに女に縁がない俺にとっては、喜ぶほどのことでもない。

こんなのは、テンションが高い性悪男子めいじつちに任せるとしよう。  
視線を教卓から逸そらす。

ドアが開いた。ガラガラと音を立てて。

彼女が一步教室に踏み込むと何だろう。

花のにおいがあたりに広がった。

「よし紹介しよう。彼女の名前は……。」

急いで視線を教卓へ戻した。

そこには、黒髪の美少女。

自分でも分かった。

心が動揺している。心臓の音が隣近所の席の人にまで聞こえるような感じだった。

俺の心臓と同じように男子女子関わらず早速話題になって

あっちこっちで騒ぎまくっていた。

「静かにしなさい。彼女の名前は、月下つきしも 楓さんだ。  
よろしく頼むぞ。」

楓は、先生が説明し終わったのを見計らって「よろしくおねがいします」と、笑顔でお辞儀をした。

この出会いが僕のこれからを変えることに繋がることになるとは。  
まだ俺は、気づいていない。

It continues .

## 雨のち晴れ 第2章（靈感……？）

（あらすじ）

幽霊大国日本。

その国には、幽霊を成仏させる葬儀師（ソウギシ）と呼ばれる者たちがいた。

その国に住む中学3年の少年 村田 慶介（むらた けいすけ）は、窓ばかりを見つめる少し変な少年だった。

そこに転校してきた美少女 月下 楓（つきしも かえで）とはいったい何なのか？

~~~~~

雨の日に再会し雨の日に出会った。

いつもの笑顔で。

現在でも、うる覚えに過ぎない。

でも忘れることはできない。

その日に出会って、一生をともにした。

あの子の事を……。

（雨のち晴れ 第2章靈感……？）

中間テストも終わり6月になった。

これから雨が多くなる時期に突入する。

そして、5月の末ほどに転校してきた楓（かえで）さんも大分学校に慣れたらしい。

相変わらず男子に人気で、俺も時々見とれてしまうほどの美貌（ひびょう）を併せ持っていた。

性格も優しくクールに受け答えするところから心の中まで綺麗なのが伺えた。

俺は恋には、無縁の存在である。
なのに一体あのときの心臓の高鳴りは、なんだったのか……。

3年に進級してからなぜか前まで仲良くしていた友達が俺を無視するようになった。

声をかけても何も言わずに遠ざかっていく。

家に帰ると、優しかった親もすぐに寝てしまっていて机の上に晩御飯とメモがおいてあった。

メモには

（おかえりなさい。チンして食べてね）

と、書いてあったがなぜか家に帰ると腹が減らないのでお菓子など食べる毎日。

自分でも気づいていた。

2年生の時より自分の生活が崩れていた。

それからだ。

誰とも話そうとせず休日は部屋に引きこもりがちになったのは。

それからだ。

窓を見て考え込むようになったのは。

それからだ……

「またか……。」

休み時間ほとんど動かない俺が動く時は、それなりの事情がある。

俺は、階段の裏にある人一人がやっと入れるほどのスペースの中を覗き込んだ。

そこには、女の子がしゃがみ込んで泣いている。

それからだ。

霊が見えるようになったのは。

その女の子は、ピンクの服を着ている。予想で幼稚園児ぐらいの年であろうか。

俺は、3年になってほぼ毎日こんな状況に陥^{おちい}っている。最初は、驚いたが慣れると怖いものでもない。

なぜなら、霊とは体を失った魂。つまり人間から肉体を取ったに過ぎない

ある種の人間なのである。

だから、俺は人間と同じ扱いをする。

年相当の霊としての扱いといったら良いだろうか。

年下なら優しく声をかける

気持ち悪いとも思わずに。

「こんなところでどうしたの？」

俺は、性に合わないが少しニコニコしながら声をかける。

それが、靈感を持つ者の使命だと思う。

テレビなどの心霊写真番組のほとんどがうそだと思う。

でも、本当に霊からのメッセージだったら。

テレビゲストは、それを驚いてそれを見ている視聴者をビビらせて。

メッセージを見逃しているとしたら。

霊は怖いもんじゃない。それを人間へ知らせるために俺は靈感という能力を手に入れたのだと思う。

女の子は、何も答えず泣いている。

「へえ〜。君、靈感あつたんだ。」

後ろから誰かに呼ばれた。

俺は、背筋が凍るほど驚いた。

誰もいない設定で女の子の霊と対話していたからだ。

後ろを振り向くと、髪の長い美少女。

月下^{つきしも} 楓^{かえで}である。

「お前も靈感あつたのか!？」

「シー。声がでかい。」

あまりの意外な人物の登場について大声が出てしまった。

「これでもね私。葬儀師シキウシなのよ。」

辺りを気にかけて楓が言う。

「えっ!あの霊の成仏を専門とする葬儀師?」

「そうそう。」

楓が応答し終えると

女の子の前に楓が立った。

階段の前の狭いスペースに女の子と楓が2人。

楓の制服とスカートが後ろの白い壁に摩すっている。

楓は、2回ほど手拍子をした後に

ポーと見ている女の子の肩に手を乗せる。

「でも、慶介君は誤解をしている。葬儀師は、成仏させるんじゃない。

生まれ変われるように手助けをするだけ。」

その時、太陽並みの光と風船が破裂したかのような音が当たりに響いた。

女の子は、スッと消えていった。

「ミッション完了!」

楓は、上機嫌に俺の肩をたたいて立ち去っていった。

It continues .

雨のち晴れ 本編1章(母親探し)

長いプロローグも終わり本編突入です。
更新できなくてごめんね Nさん

~~~~~

(雨のち晴れ 本編1章母親探し)

楓は、上機嫌に俺の肩をたたいて立ち去っていった。

いや、立ち去ろうとした楓を俺が呼び止めた。

「あいつどうなったんだ？」

あいつと言つのは、消えた少女のことであった。

普段より声の張った感じに問い詰めたために楓にも戸惑いがあった。

「慶介君。幽霊は、自分が死んだことに気づいていない。」

「えっ？」

「死ぬ瞬間は、ほんの0.数秒の世界。だから、霊自身が自分のことを

霊だと認識した時、未練を断ち切った時に成仏する。」

「.....」

あまりの世界観に俺は圧倒された。

「ただ、幽霊を成仏させるのは簡単なことじゃない。今の子だって成仏させたわけじゃない

一時的に消しただけ。」

「どういうことだ？」

「自分自身が霊と気づいても未練を断ち切ってやらないと霊自身が成仏を



拒んでしまうの。」

楓は、ポケットから白色の手袋を取り出した。

手袋には、何か文字らしきものが書いてあったが読めなかった。

楓は、右手の手袋を口に銜くわえている間に左手に手袋をはめた。

「ここからが本番！」

彼女の目は、輝いていた。

楓にとってこの仕事がいのある仕事だということだろう。

楓は、両手に手袋をつけると階段の前の狭い薄暗いスペースに立った。

人目を気にしているのだろう。ここなら階段が死角になって見えにくい。

楓は、手袋を付けた手を合わせて呪文のようにつぶやく。

「除じょ霊れい法第10条。視しかい界わ話わ法。」

あまり理解ができなかったが、俺たちの前にさっき消えた少女がゆつくりと姿を現した。

「これで、霊から私たちのことが見えるようになったし話せるようになったわよ。」

「えっ！霊ってこつちのことが見えなかったの？」

「あたりまえじゃん。」

(どつりでさっき話しかけても無視してたわけだ。)

「お兄ちゃんたちこんなところで何してるの？」

「え？いや〜」

君は幽霊です。と、言えないので俺は戸惑ってしまった。

「ねえ。お姉ちゃんの質問に答えてね。」

すかさず楓がフロアに入ってきた。

少女は、コクリとうなずいている。

「何か困ったことはない？」

「うーんとね。ママが、どっかいつっちゃったの〜!」  
ほとんど半泣きになりながら言う。

(それが未練か。そいつを断ち切れれば霊だと認識するかも)  
楓は、心の中でつぶやいた。

「じゃあ。一緒にママ探しに行こうか。」

「うん!」

少女はうれしそうだ。

俺はそれを見ていて楓を見習わないといけないところがたくさんあるような気がした。

俺は、戸惑って真実を言えなかった。

彼女は、直接的に真実を伝えなくても霊自身に向き合って話していた。

霊を人間と一緒にの扱いをしていなかったのは、俺のほうだったのかもしれない。

俺は、その時から楓に引かれていったのかももしれない。

俺たち二人は、母親を探すために歩いていった。

I t c o n t i n u e s .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0865j/>

---

魔王ゴリラ君傑作短編集

2010年10月9日19時32分発行